

読みがたりむかし話資料にみる四国方言の敬語

酒井雅史

1. はじめに

日本語諸方言の敬語運用については、加藤（1973）で指摘された「敬語の西高東低」や、井上（1981）による「敬語体系全体の丁寧語化」といった特徴が広く知られるところである。

一方、日本語諸方言の敬語運用の地理的分布については、話題や登場人物の統制という点で自然談話資料では等質なデータをもとに対照することが容易ではないなどの理由によりその詳細は明らかにされていない。酒井（2019・2023）では、この点を考慮に入れた分析を行える談話的資料として『読みがたり各県のむかし話』（以下、『むかし話』資料。）を用いて、関西方言および関西周縁部方言における素材待遇形式の分布および、素材待遇形式をどの程度用いるかに関する地理的分布について明らかにされている。

本稿では、『むかし話』資料を用いて、酒井（2019・2023）で扱われている関西方言および関西周縁部方言と地理的に隣接する四国方言における素材待遇形式の分布について概観する。また、関西方言および関西周縁部方言とあわせて、素材待遇形式をどの程度用いるかに関する分布についてみる。

以下、2節で『むかし話』資料について紹介したのち、3節で分析について述べ、4節で『むかし話』資料に現れた素材待遇形式の分布についてみる。5節はまとめである。

2. 『むかし話』資料について

本稿で分析に用いる『むかし話』資料は、1973～1978年に刊行された『各県のむかし話』の改訂版として2004～2006年に刊行されたものである。『むかし話』資料は、各地に伝わる伝承や伝説を語ったものを再録した資料である。他の昔話を収めた資料と比べて、各府県内での地域的な偏りが出ないように万遍なく昔話が集められており、全国的な分布を対照するための談話資料として扱えるものである。また、編集の段階で地域の人をはじめ教育委員会等多くの人間が関わり、各地の方言らしさが損なわれないよう編纂されている。以上の特徴を持つ『むかし話』資料は、各県およそ同じ分量の話が収められており（40～70話；60,000～80,000字程度）、地域特有の話とともに、都府県間で共通する話も収められている。

『むかし話』資料は、むかし話を語るという日常談話における使用実態の一部を反映した資料として位置づけられ、文末表現の定型性について全国的な分析を行っている日高（2013, 2018）のほか、大阪方言のノダ相当形式ネン・テンの成立を検討した野間（2014）、関西方言の素材待遇形式の分布について述べている酒井（2019・2023）、存在動詞の分布を概観している酒井（2021）やアスペクト形式の分布を扱った酒井（2022）などがある。

本稿では、各地方言の実態を反映した談話の一つである『むかし話』資料を用いて、酒井（2019・2023）で確認された「素材待遇形式をどの程度用いるか」ということに関する地理

的連続性についてみることを目的とする。

3. 分析について

本稿では、酒井（2019）で扱った関西方言および酒井（2023）でその周縁部として扱った地域に隣接する四国方言を分析対象とする。各県で分析対象とした資料の分量は、表1の通りである。

表1 分析対象とした分量

| 府県 | 地域 | 話数 | 府県 | 地域 | 話数 |
|----|-----|----|----|----|----|
| 徳島 | 北東部 | 30 | 愛媛 | 東予 | 23 |
| | 西部 | 9 | | 中予 | 16 |
| | 南部 | 21 | | 南予 | 19 |
| | 計 | 60 | | 計 | 58 |
| 香川 | 東讃 | 22 | 高知 | 東部 | 17 |
| | 中讃 | 30 | | 中部 | 11 |
| | 西讃 | 10 | | 西部 | 13 |
| | 計 | 62 | | 計 | 62 |

分析にあたっては、酒井（2019・2023）と同様に、まず、『むかし話』資料で分けられている各府県内の地域区分ごと¹⁾に有標形式と無標形式を集計した。集計の際は、地の文と会話文に分けて用例を収集した。用例の収集作業は基本的に資料に現れた動詞述語全てを拾い、いずれの素材待遇形式が使用されているかを確認するという方法を採用した。ただし、(1)のように1文中で動詞述語が複数現れても同じ動作主の一連の行動を描写しているものは、主節末の動詞述語を1例として数えている²⁾。

- (1) (略) 地藏さんはかわいそうになってきたんじゃろ、すくっと立ちあがって、ころものすそをからげて、いそのさきまで歩いてこられたんじゃ。

【クジラのお礼まいり：愛媛（東予）】

4. 『むかし話』資料に現れた素材待遇形式

本節では『むかし話』資料に現れた素材待遇形式について、4.1節で分析対象とした四国4県の『むかし話』資料における素材待遇形式の使用についてみたのち、4.2節で有標の素材待遇形式の使用率に関する分布について触れる。

- 1) 『むかし話』資料では、それぞれの話の再話地の地図が記載されている。本稿では、『むかし話』資料に記載されている地点と既存資料の方言区画とを照らし合わせて地域区分を設けた。
- 2) 以下、本発表で引用する例文の出展を【話の題：府県（府県下の地域）】の形で用例の末尾に示す。また、文に現れた動作主を□で囲み、分析対象の動詞述語をゴシック体で示す。なお、() で示したものは、理解のために筆者が補った文脈や動作主などを表す。

4.1. 四国方言における素材待遇形式の使用状況

分析対象とした四国4県の『むかし話』資料で用いられていた素材待遇形式の調査結果を示すと表2のようであった。表2では、使用数が限られていたオッサル(2)・オイデル(3)を「特定形」、ナサレル(4)・ナル(5)・ナンス(6)・テオイデル(3)・テツカイ(7)・テツカを「その他」、ヤガル・クサルを「その他の卑罵形式」としてまとめて示している。なお、「テツカサル・テツカハル」およびその他の形式としてまとめた「テツカイ」は、これら以外の形式とは異なり、素材待遇形式ではない。藤原(1979)では「特定謙譲法助動詞³⁾」として、「ツカーサイ類」が立項され、その地理的分布について「ともあれ、中国地方は、問題の事象の一大領域として注目される。これについて注目されるのが、四国地方である。中でも愛媛県下・高知県下に「ツカーサイ」がよくおこなわれていようか。」(藤原 1979: 47-48)とあり、『むかし話』資料において一定数の用例が見られたことから今回分析の対象として取り上げている。

表2 『むかし話』資料における素材待遇形式

| 府県 | 地域 | 待遇場面 | 特定形 | オ～ナサル | (ラ)レル | ナサル | ナハル | シャル | テツカサル テツカハル | ヨル | その他 | その他の 卑罵形式 | 計 | φ |
|----|-----|------------|-----|-------|-------|-----|-----|-----|----------------|----|-----|--------------|----|-----|
| 徳島 | 北東部 | 会話文 地の文 | | | | | 1 | | 10 | | 4 | 2 | 17 | 110 |
| | 西部 | 会話文 地の文 | | | | | | | 1 | | | | 1 | 526 |
| | 南部 | 会話文 地の文 | 3 | | | 1 | | | 4 | | 3 | | 11 | 64 |
| 香川 | 東讃 | 会話文 地の文 | | 2 | | | | | | | | | 2 | 48 |
| | 中讃 | 会話文 地の文 | | | 1 | | | | | | | | 1 | 386 |
| | 西讃 | 会話文 地の文 | | | | | | 1 | | | 1 | | 2 | 31 |
| 愛媛 | 東予 | 会話文 地の文 | | | | 2 | 1 | | 1 | 1 | | | 5 | 27 |
| | 中予 | 会話文 地の文 | | | | | | | 2 | 3 | 1 | | 7 | 404 |
| | 南予 | 会話文 地の文 | | | | | | | | | | 2 | 4 | 8 |
| 高知 | 東部 | 会話文 地の文 | | | | | | | 4 | | | | 2 | 256 |
| | 中部 | 会話文 地の文 | | | | 1 | 35 | | 4 | | 2 | | 42 | 10 |
| | 西部 | 会話文 地の文 | | | | | 32 | | | | | 1 | 37 | 318 |
| 高知 | 東部 | 会話文 地の文 | | | 1 | | | | 3 | | | | 4 | 34 |
| | 中部 | 会話文 地の文 | | 4 | | 3 | | 2 | | | | | 7 | 400 |
| | 西部 | 会話文 地の文 | | | | 1 | | | 3 | 1 | | | 9 | 40 |
| 高知 | 東部 | 会話文 地の文 | | | | | | | 2 | | | | 1 | 284 |
| | 中部 | 会話文 地の文 | | | | 5 | | | | | | | 8 | 41 |
| | 西部 | 会話文 地の文 | | | | | | | | | | | 0 | 343 |

(2) はいはい、だいじょうぶでございます。わたくしの話を聞けば、**どなたも**必ず『もうええ。』と、**おっしゃいます**。 【アリの米運び：徳島（南部）】

(3) a. そうじゃ、助けられたおかげで今のように**えろうなったぼうさん**は、(中略)ほらほら、けさもおがみにおいでた。 【フゴで飛んだ子：徳島（南部）】

b. 今日は背を**向けておいで**じゃなあ。 【ゴロゴロ地蔵：徳島（北東部）】

(4) これこれ、**お鷹匠**。その者をとらえていかなされる。 【水越のタヌキ：徳島（北東部）】

3) 藤原(1978・1979)において、命令形の形でのみ用いられ、懇願や依頼など特定の用法でのみ用いられる謙譲表現に対して用いられる用語である。

(5) 安心しなれ。どがいなことがあったち切りやあせなあな。

【とらさん床屋：愛媛（南予）】

(6) 気いつけちいきなんせよ。

【白べん黒べん：高知（西部）】

(7) へぐらい、だれでもこく。へのどこが悪い。かんまんけん、よめにきてつかい。

【へこきよめ：徳島（南部）】

表2から、次のことが指摘できる。すなわち、いずれの方言においても地の文での有標の素材待遇形式の使用数は少ない。また、ほぼすべての地域で地の文よりも会話文の方が有標の素材待遇形式の使用数の多いことが分かる。地の文における上位待遇形式は、ナサル系のナハルが最も多く現れたが、使用される方言は愛媛県南予方言に限られる。標準語形式の(ラ)レルも同様に、使用が愛媛県に集中しており、四国方言全体ではほぼ無敬語と言ってよい出現状況であると考えられる。

地の文にみられる傾向は会話文においても同様であるが、ナサル・ナハルの使用に加えて香川県を除く3県ではテツカサル・テツカハルの使用が見られる。

以下、有標の素材待遇形式について各県下の用例を順にみていく。

標準語形式の上位待遇形式であるオ～ナサルは香川県東讃方言と中讃方言、高知県中部方言でのみ使用がみられた。このうち香川県東讃方言と中讃方言の用例はすべて依頼や勧めの発話における「オ～ナサル」の命令形の使用に限られていた。また、高知県中部方言に現れた用例はすべて4種の化け物が順に登場する場面における決まり文句のような発話であり、当該方言で生産的に用いられる形式であるとは言い難い。

(8) おじゅっさん(和尚さん)。うちにや、なんちゃんいきに、ふろにでも入っておくれなさんせ。

【大けなおなら：香川（中讃）】

(9) さあさあ、ずっと、お通りなされ。こよいは、よい生ざかなもあり。

【ト トン トン トン ていていこぼしは おやどにか：高知（中部）】

一方、同じ標準語形式の(ラ)レルは、使用がみられた方言は限られるものの、いわゆる上位者と考えられる人物に対して用いられており、各方言において上位待遇形式として用いられていることが窺われた。

(10) a. わけを聞かれたおしょうさんは、「おまんらは、わしのいうことを聞かざったんじゃきに、ほんでよ。(略)

【リンおしょう：高知（東部）】

b. 浦島太郎はゆめ見よるような気持ちでいると、おとひめさまが出てこられて(略)

【浦島太郎：香川（西讃）】

c. むかしむかし、お大師様(弘法大師)は、四国をごじゅんれいのとちゅう、九島ががいに気に入られたんじゃ。

【オンドリとお大師様：愛媛（南予）】

方言形式のナサル・ナハルも標準語形式と同様に上位者と考えられる人物に対して使用されていたが、ナハルが愛媛県南予方言に偏って出現しているという地域差がみられた。

(11) a. そこな、しわざき(今の塩屋崎町)の信号のできちゅうへんに、おいなりさんがありなさるが……(略)

【夜なきうどん：高知（中部）】

- b. そしたらいつごろ帰りなされるか。 【大歳の客：愛媛（南予）】
- (12) a. **おしょうさん**がかねをたたく棒を持ってきて、観音様の頭を、ひとつたたきなはった。 【観音様のせっかん：愛媛（南予）】
- b. これは、これは、**とうといお方**が道ばたでおやすみなはつとるぞ。もったいない、ありがたいお方じゃ。失礼があつてはならんぞ、およけもうせ。
- 【入田の化け物道：高知（北東部）】

『むかし話』資料に現れた用例数としては、ナハルに次いでテツカサル・テツカハルが多く用いられていた。藤原（1979）によると、愛媛県方言・高知県方言において広くみられるが香川県方言・徳島県方言では少ないとされる。徳島県方言では南部で「ツカサレ」が、西部で「ツカーサイ」が、香川県方言では主に瀬戸内海島嶼部の東部で「ツカサイ」が用いられることが記されている。『むかし話』資料では、これらの記述とは異なる用例も見いだされた。

- (13) a. いのでええから、お経を一つ**教えてつかはれ**。 【ネズミ経：徳島（南部）】
- b. こうなれば、もう、にげもかくれもいたしません、今はめでたいお正月。どうか、お正月がすむまで**まってつかはれ**。
- 【おりづるにのつたおじゅっさん：徳島（北東部）】
- c. へぐらい、だれでもこく。へのどこが悪い。かんまんけん、よめにきてつかい。 【へこきよめ：徳島（南部）】
- d. **おぞうはん**が子どもとよう遊んでつかはいよる。おぞうはんが**見てつかはる**けん安心じゃ。 【遊びたかった地蔵：徳島（北東部）】
- e.
- (14) ぜには法事の帰りにわたすきに、それまで**待つてつか**。
- 【こぞうはんとカメ：香川（西讃）】
- (15) a. あんたの望みどおり、飯も食わずによう働きますに、どうぞ嫁にしてつかあさい。 【食わずの嫁：愛媛（東予）】
- b. ああ、かまんかまん、ねるとこはむしろをしいた土間でもかまんけん**とめてつかあされ**。 【大歳の客：愛媛（南予）】
- (16) a. (略) こんだあ、役人さんがさがしてきて**つかあれ**。【通り矢：高知（中部）】
- b. (略) あさつてはもどつてきますけに、それまでゆっくりして**いてつかさい**。
- 【はたまが淵：高知（西部）】

徳島県方言では南部でテツカハレが使用される点は、藤原（1979）と一致する（13a）が、北東部においても用いられていた（13b）。一方、西部でみられるとされる「ツカーハイ」という形は、『むかし話』資料では現れず南部にて用いられていた（13c）。さらに、命令形もつばら用いられ懇願や依頼を表すとされる形式であるが、命令形以外の用例もみられた（13d）。香川県方言では「ツカサイ」がみられるとされているが、この形はみられず、縮約形と考えられるテツカのみが3例現われていた（14）。愛媛県方言（15）および高知県方言

(16) ではツカーサレ・ツカーサイともにみられ、藤原(1979)の記述と齟齬はなかった。

さいごにヨルおよびその他の卑罵形式について触れておく。ヨルについては、明らかに単純なアスペクトとして使用されているものではないと判断したもののみを用例として収集した。(17)～(20)の例にみるようにヨルの例は、すべて話の中で登場人物間でのあるいは語り手から好ましくない言動を行った登場人物への驚きや悪感情を表していると思われるもののみであった。

(17) **サル**が、「じいさん、じいさん。そのかわり、じいさんとこのむすめをわしのよめにくれるかい。」ていいよった。じいさんは、むすめをよめにくれいうたって、サルやこしにやれるかい(略) 【サルのみこ入り：香川(中讃)】

(18) (略) この寺を建てたとき、**大工の頭領**が、このわしを、天じょううらへ、わすれていきよった。それからきょうまでの長い間……。

【ト トン トン トン ていていこぼしは おやどにか：高知(中部)】

(19) ほうして、ぐいぐいぐいぐいと熱い飯を平らげてしもうて、「ああ、うまかったあ。」こういいよったんじゃちゅう。 【食わずの嫁：愛媛(東予)】

(20) 「おのれ、この大ダヌキめ、よくも新兵衛をだましよったわい。」(略) タヌキは、大きな声でおらびながら、氏神の森へにげていきよった。

【しりやき新兵衛：愛媛(東予)】

その他の卑罵形式は、クサルとヤガルが用いられていた。これらの形式もヨルと同じく登場人物間でのあるいは語り手から登場人物への悪感情が現れていると思われる用例のみであった。

(21) 家へもどると、**じいさん**は、すぐに、ゆっくりいうたらええのに、あわてくさって(略) 【穴地藏さん：愛媛(南予)】

(22) こらいかん、おれはとっていでやいてくおうとおもったのに、せ中あぶりにいきよるんじゃがとぬかしやがる。**ドンコ**は、おれの考えていることを知っていやがって、こわいやつじゃ。 【北が森のドンコ：愛媛(中予)】

(23) 「やれやれ、いにくさったわい。」といいもって、えっさかほっさか山道を登って行くと、また、**山んば**が出てきて(略) 【山んば：香川(西讃)】

(24) 「いとこならまだええわ。この前やかい、徳島の町へ用事で行とつたら、**ぼろつたのさむらい**が(略) 三日も四日もとまりくさる。(略)

【えべっさん、いらん：徳島(北東部)】

(25) 「これは、ほんまじゃ。」と、戸を開けて外を見ても、なんやない。「また、だましくさって。」と、クシャミをして、(略)

【八万のタヌキ ぬすつとのまねをするタヌキ：徳島(北東部)】

なお、ヨルおよびその他の卑罵形式が使用されていた登場人物に対しては上記の用例以外では使用されておらず、上位か下位かといった関係性待遇ではなく感情性待遇による用例のみがみられた。この点において同じくこれらの形式が使用される近畿方言とは異なる

ことを付言しておく。

4.2. 素材待遇形式使用率の分布

酒井（2019・2023）では関西方言およびその周縁部方言の地理的分布についてみた。本節ではこれらとあわせて四国方言の地理的位置づけについてみる。

各地方言域ごとに素材待遇形式の使用率を示すと表 3 のようになる。表 3 では他の形式とは敬語的性格の異なるテツカサル・テツカハル・テツカイ・テツカを除いた使用率を算出しており、会話文と地の文を比べた際、使用率の高い方を黒字白抜きで示している。

表 3 各府県における有標形式の使用率

| 府県 | 地域 | 待遇場面 | 有標率 (%) | 府県 | 地域 | 待遇場面 | 有標率 (%) |
|----|-----|------|---------|----|----|------|---------|
| 徳島 | 北東部 | 会話文 | 3.5 | 愛媛 | 東予 | 会話文 | 12.9 |
| | | 地の文 | 0 | | | 地の文 | 1.7 |
| | 西部 | 会話文 | 0 | | 中予 | 会話文 | 20.0 |
| | | 地の文 | 0 | | | 地の文 | 1.1 |
| | 南部 | 会話文 | 5.9 | | 南予 | 会話文 | 79.2 |
| | | 地の文 | 0 | | | 地の文 | 10.4 |
| 香川 | 東讃 | 会話文 | 4.0 | 高知 | 東部 | 会話文 | 2.9 |
| | | 地の文 | 0.3 | | | 地の文 | 1.7 |
| | 中讃 | 会話文 | 6.1 | | 中部 | 会話文 | 13.0 |
| | | 地の文 | 0.2 | | | 地の文 | 0.4 |
| | 西讃 | 会話文 | 20.0 | | 西部 | 会話文 | 12.8 |
| | | 地の文 | 1.1 | | | 地の文 | 0 |

4.1 節にて地の文よりも会話文での有標の素材待遇形式の使用数が多いことを述べたが、使用率の点から見るとすべての地域で会話文の方が高いことが分かる。ただし、地の文よりも多く用いられる会話文においてもその使用率は決して高くない。愛媛県南予方言が 79.2% と最も高い使用率であり、つづく香川県西讃方言と愛媛県中予方言の 20% と比べる約 4 倍の使用率となる。これらの方言における使用率が比較的高いものの、その他の方言ではほとんどの方言で 10% を下回っており、有標の素材待遇形式があまり用いられない方言が大勢を占めることが分かる。

四国 4 県における有標の素材待遇形式の使用率についてその分布を図 1 および図 2 で確認しておく。図 1・2 では四国方言の地理的位置づけを考える際の参考として酒井（2019・2023）でみた関西方言と関西周縁部方言の状況も合わせて示している。

図 1・2 より、地の文・会話文ともに、各方言の対岸に位置する方言と使用率の傾向が一致しており、地理的連続性のあることが窺われる。有標の素材待遇形式がほとんど用いられない地の文からは判断がつかないが、会話文における使用率からは、四国 4 県の中でも徳島県方言が有標の素材待遇形式の使用率が最も低い。徳島県方言に隣接する香川県方言および高知県方言では、西に行くに従って有標の素材待遇形式の使用率が高くなる分布となっ

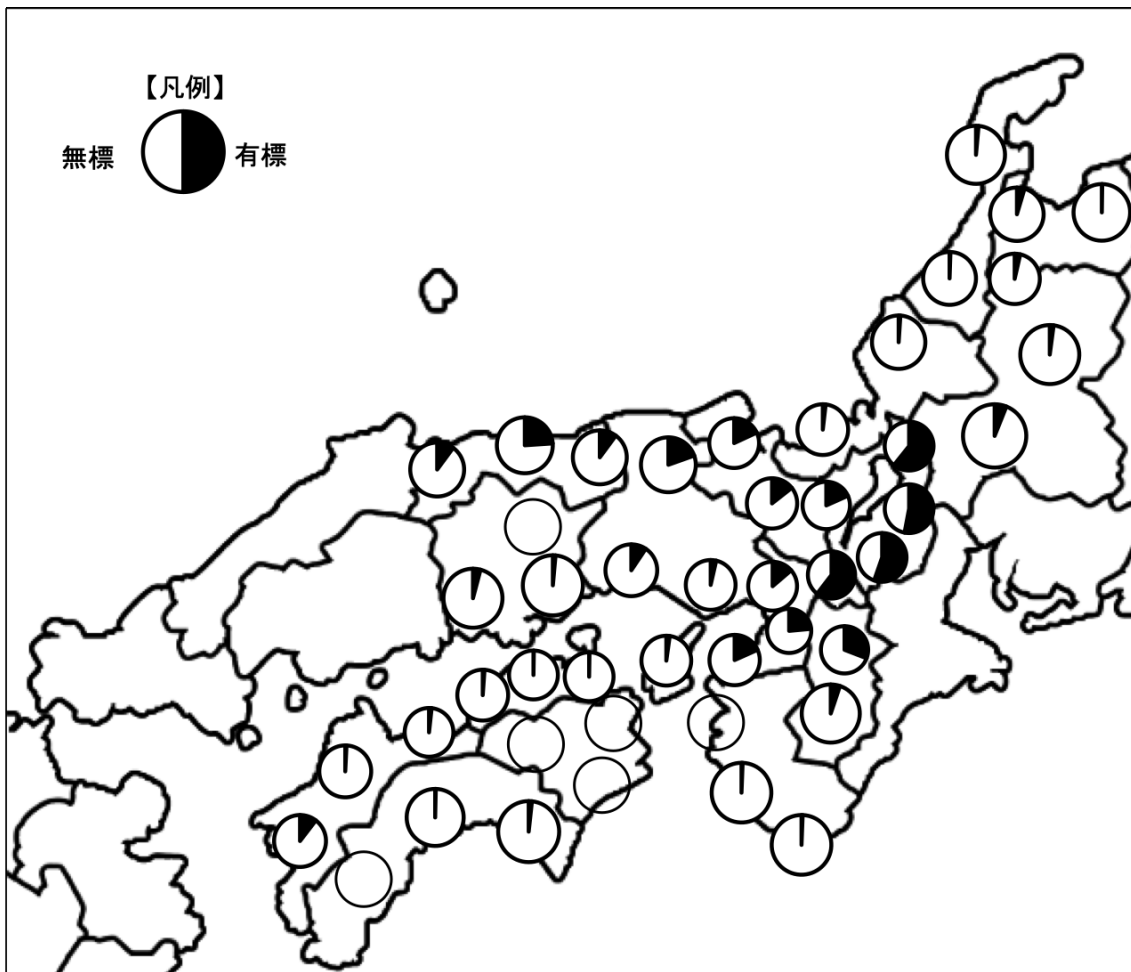


図1 有標形式の使用率分布（地の文）

ており、愛媛県方言特に南予方言で高い使用率となるという分布をみせる。これらの地理的分布状況は、今回分析が及んでいない広島県方言や山口方言、九州方言との連続性もあわせてさらに検討する余地がある。

5. まとめ

本稿では、『むかし話』資料に現れた四国方言で用いられる素材待遇形式について触れた（4.1節）。また、関西方言および関西周縁部方言としてすでに分析を終えている方言における有標の素材待遇形式の使用率に関する地理的分布とあわせて地理的分布について述べた（4.2節）。酒井（2023）では素材待遇形式の有標率と各方言で用いられる素材待遇形式には相関関係のあることが示唆されたが、今回分析対象とした四国方言の中でも有標率の高い方言ではナサル系の素材待遇形式の使用が目立ったことが注目される。『むかし話』資料の資料的性質を考慮に入れた各方言における詳細な分析は、まだ分析が及んでいない地域の結果とあわせてみていく必要がある。今後の課題としたい。

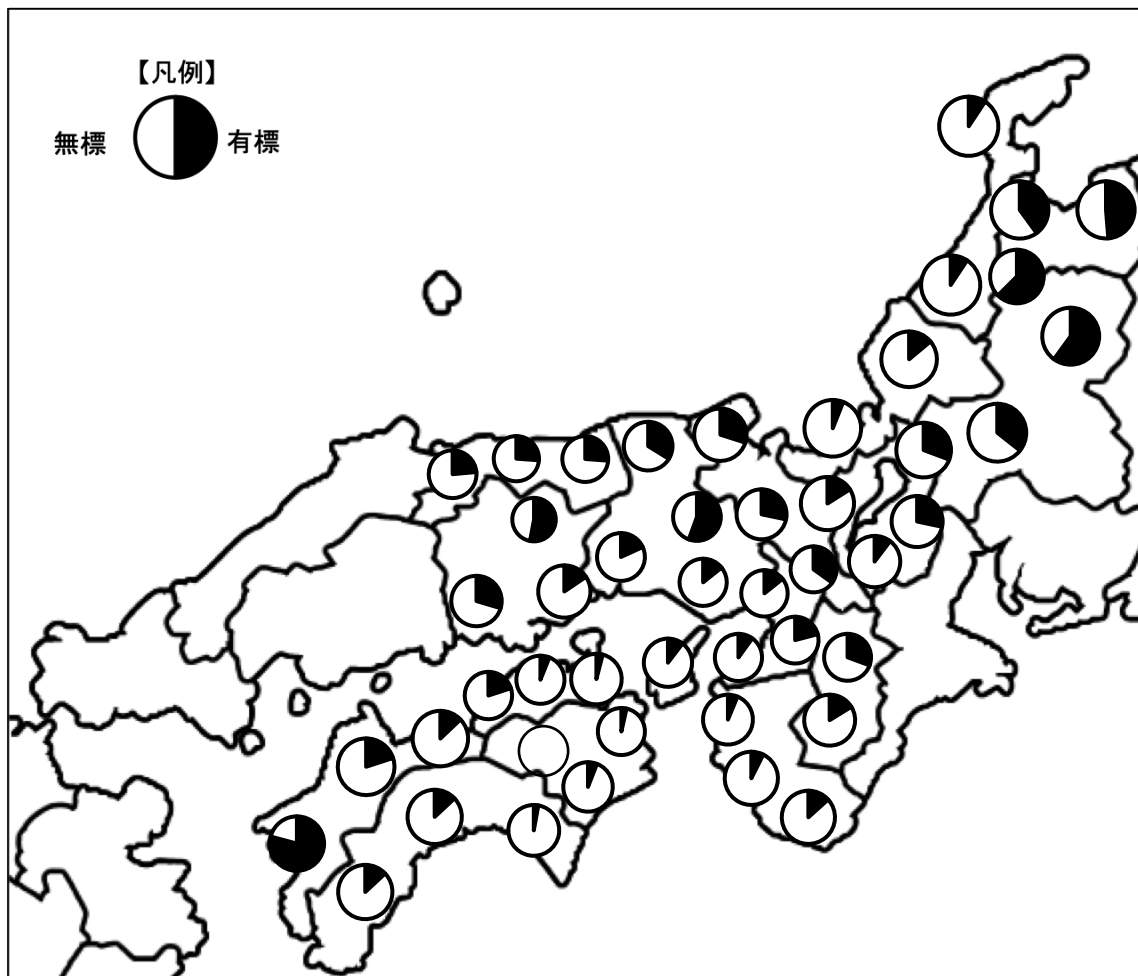


図2 有標形式の使用率分布（会話文）

【付記】本稿は JSPS 科研費 26244024 および 20H00015, 19K20788, 20K13047 の成果の一部である。

参考文献

- 加藤正信（1973）「全国方言の敬語概観」林四郎・南不二男編『敬語講座 6 現代の敬語』pp.25-83, 明治書院.
- 酒井雅史（2019）「関西方言における素材待遇形式の分布—読みがたり昔ばなし資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』31, pp.1-15, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- （2021）「読みがたりむかし話資料にみる存在動詞の分布」『甲南国文』68, pp.47-61, 甲南女子大学日本語日本文学科.
- （2022）「読みがたりむかし話資料にみるアスペクト形式の分布」『甲南国文』69, pp.左 2-15, 甲南女子大学日本語日本文学科.
- （2023）「読みがたりむかし話資料にみる近畿周縁部方言の敬語運用素描」『甲南国

- 文』70, pp.左 39-48, 甲南女子大学日本語日本文学科.
- 野間純平 (2014) 「近畿方言におけるネン・テンの成立—昔話資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』26, pp.51-69, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 日高水穂 (2013) 「「昔語り」に現れる文末表現の地理的分布」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書 —言語地図と方言談話資料—』pp.13-32, 国立国語研究所.
- (2018) 「昔話の談話構造と表現形式にみる地域性」『國學院雑誌』119-11, pp.217-230, 國學院大學文学部資料室.
- 藤原与一 (1978) 『昭和日本語方言の総合的研究第一卷 方言敬語法の研究』春陽堂.
- (1979) 『昭和日本語方言の総合的研究第二卷 方言敬語法の研究続篇』春陽堂.

(文学部 非常勤講師 桃山学院教育大学 准教授)